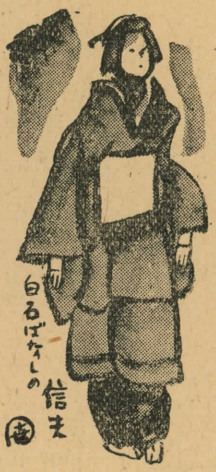
文樂解放論

わたしの耳目修行（下）



本山荻舟

大正二年に先代の大隅太夫が、臺灣巡業中客死した時、わたしは報知新聞にゐたが、當時のいはゆる棧敷連中（新聞劇評家）には、この太夫を知つてゐる人が非常に少かつた。それほど本場の義太夫を聽く機會が乏しかつたわけで、明治以來打絶えてゐた人形淨瑠璃が、當時の東京人に新しい印象を與へたのは、たしかその三四年頃、數寄屋橋内の前期有樂座にかゝつたのが初めであつたと思ふ。

人形は文五郎・小兵吉・政龜等の外、四世吉田辰五郎などゝいふ、老練の達者がゐたのをおぼえてゐるが、太夫の方は古靱の外はとんど記憶に殘つてゐない。知人に古靱びいきがゐて、東京出身といふことも手傳つたのだらう。頻りにほめそやして、わたしにもほめることを强要する風だつたが、當時のわたしにはまだ、二代目津太夫や三代目大隅の亡靈がつき纏つてゐたから、なるほど古靱の行届いた纖細な語り口は首肯できるけれど、全體としての器局が小さく、いはゆる非力な點で同調し難く、得意らしい『良辨杉』あたりを除くと、後來今のやうに圓熟した、立派な太夫にならうとは思へなかつた。

その辨人形の方では、三世玉造の良辨がじつくりと動かない味に感心した外、絶對に文五郎支持で、恐らく二世紋十郎以來とまで心醉し、實は動き過ぎる割にあまり面白くない良辨の母渚まで、先紋十郎で見た『信長記』の乳母侍從を思ひ出したほどだが、立役遣ひの辰五郎などは、荒つぽ過ぎるやうで共鳴できなかつた。立役人形の長過ぎる手足が氣にならなくなつたのは、更にずつと後だつた。

この頽ぶれの有樂座興行は、その後數年繰返されたが、一方では新富座に文樂の素淨瑠璃が折々來るやうになつた。三世越路が紋下になつてからだから、大正四五年からだらう。先輩の岡鬼太郎氏が越路黨で、華實共に備はつた點では、先代（攝津大掾）以上だと、來る前から激賞してゐたのが、十數年前の文字太夫時代以來聽く機會のなかつたわたしには、容易に呑込めなかつたところ、いよ〳〵久しぶりに聽いて見ると、すつかり語り口が變つたやうで、貫祿といふか藝格といふか、さすがに堂々となつて居り、殊にもとは大掾寫しの美聲だと思つてゐたのが、いはゞいぶし銀のやうに落ついたサビのある名調子に、實は内々驚異した位であつた。

艶語りといはれて『十種香』や『朝顔』などを得意とした三世南部太夫の「サシスセソ」が「シャシシュシェショ」と聞える發音や、それでゐてさも美音がつてゐるのが氣になつて、どうしても好きになれないといふと、岡君がまた「いかにもそれはもつともだけれ

ど、しかし何といつても、看板の大きいことは爭はれぬ」と、バツを合せながら釋明されたのには、首肯せざるを得なかつたことを覺えてゐる。かつて先代越路の『吉田屋』で、餅つきを語つた八世むら太夫――一本調子ながら美聲の老人が、健在でいつも追出しを、語つてゐたのを、なつかしいと思つてしまひまで立たなかつたこともある。

人形入りのいはゆる引越興行が、松竹の手で初めて行はれたのは、大正八年夏の新富座であつたとおぼえてゐる。頭取の玉吹郎が親切に人形の說明をしてくれ、女形で手拭や袖口などをくはへる人形には、唇のところに短かい針が出てゐて、それへ引かける仕掛のあることなど敎へられたが、折柄東京の新聞社に未曾有の勞働爭議が起り、ちやうど新富座の初日が、工場ストライキの初日で、數日間東京中の新聞が休刊したため、批評の機を失つたなどゝいふ思ひ出もある。

榮三の人形を見たのはこの時が初めであつたが、當時はまだ主として女形道ひで、『十種香』の奥庭で早替りなどを呼物にしたし、その直前に有樂座で、文五郎を見たばかりの際とて、實は松竹で宣傳したほどには、もう一息受入れることができなかつた。榮三に感心するやうになつたのは、ずつと後の大正末年玉藏の歿後、立役道ひに轉向してからで、文樂の人形座頭になつたのもその頃だから、恐らく當人の心境とともに、藝境にも一轉機があつたのだと思つてゐる。

その時一座に加はつてゐた六代目彌太夫は、もと長子太夫といつた時代にちよい〳〵聽いて、難聲の非力ではあるが、小味なよいところのある太夫で、十數年ぶりになつかしく聽いたのが聽納めであつた。その年の秋、多分素淨瑠璃で來た時と思ふが、越路太夫と座敷で初對面したことがある。わたしが『名人畸人』を書いてゐた頃で、小室翠雲氏から舊師の田崎草雲を加へてくれと頼まれ、その打合せに會食してゐたところへ、越路が呼ばれて來たのだが、何でも文樂へかける水引幕を、無理に懇請されて描いたのに、不束な扱ひ方をしたとかで、やかましい小言が展開され、紋下の太夫散々の體たらくに、柄にもなく仲裁役を買はされた始末となり、理非は兎も角もお〳〵として、辯解もし兼ねてゐる太夫を、大變氣の毒だと思つた記憶がある。越路が病氣になつたのは、それから間もなくだつたかも、つひにまた逢ひ初めの逢ひじまひであつた。

かつてわたしの大嫌ひだつた二代目春子太夫を聽直したのも、震災前の舊有樂座だつた。先大隅の三枚目どころを語つてゐた時分、難聲の辯に艶語りを以て任ずる氣取つた容子が、いかにも氣障に思はれたからだが、その後打絶えて聽く機會もなく、忘れるともなく忘れてゐたところ、十餘年ぶりに偶然見ると、氣取屋と思はれた當年の美男も、頭がすつかり白くなつて、聽いたのは昔得意の『酒屋』であつたが、難聲は相變らずの上、その聲量が落ちたのだから、隨分聞苦しく、評判は無論さえなかつたに拘はらず、耳を寄せるとにじみ出る情味に、實は頭が下つたのである。街氣・覇氣等の夾雜物が淸算されて、藝の地金が出たからだらうと思ひ、地金に銀へのかゝつてゐることが尊いのだと、悟り得たやうな氣がした。この太夫もこれが聽きじまひになつたが、かつて太夫の相三味線だつた二代目新左衞門は、その後も折々美しい音じめを聽かせてくれた。

震災後間もなく三世越路がなくなつて、三世津太夫が紋下になつた時分には、文樂の夕陽も薄れるやうにいはれたものだが、責任の地位について見ると、それだけの貫祿が備はつて、老功の上に幅が

加はり、伊達太夫も土佐太夫となつて枯淡の藝境に入り、一方ではまた古靱太夫を過褒する一派が、津太夫を過貶して、紋下讓歩問題などゝいふ、第三者にはイヤな紛糾も卷起つたが、しかしそんなことのために、却つて文樂の古典價値が、一般に普及認識される機緣になつたのではないかとも思はれる。

もちろんその間には、微妙な感情イキサツ等もあつたらうと察せられるが、恐らく同門の當人同士には、それほどの對立があらう道理はないのを、むしろ周圍から驅ぎを大きくしたのではないかと思ふうち、間もなく和解といふことになつて、市は榮えたと信じてゐる。

その他先大隅の遺言とかで、道八が一部の反對を押切り、まだ若かつた靜太夫をもり立てゝ四代目大隅を襲名させた披露のための上京だの、四ツ橋の新文樂が落成した當時の見聞だの、土佐太夫・吉兵衛の引退だの、津太夫歿後古靱が、いよ〳〵紋下になつてからの大成ぶりなど、思ひ出や感想は盡きないが、豫定の紙數が盡きたのと、問題がまだなま〳〵しいので、一應省略するとして、最後に今後の文樂がどうなるか、どうなつてほしいかについて、一言觸れて置きたいと思ふ。

もはや古典として保存するべき藝術で、將來性は乏しいといふのが、大體の定論になつてゐる。あるひはさうかも知れないけれど、そんなことは今に始まつたわけでなく、歌舞伎の隆昌に壓されて、人形淨瑠璃が下向きになつたのは、明和以降といはれてゐる。しかもこれを壓倒した歌舞伎で、現在代表的價値を認められてゐるのは、淨瑠璃作品が大半を占めてゐるのだ。新展開の機微がこの邊に存しないか。

淨瑠璃の太夫と三味線と人形とを、三位一體として不可分の如くいはれるのは、事實それにちがひなく、さうして發達したことも爭はれないけれど、發生の昔にさかのぼれば、操と淨瑠璃とは別物であつた。獨自に存在した操と、後に發生した淨瑠璃とが結びついて、共に榮えたことに間違ひはないにしろ、もと〳〵合せ物である以上、もつと大きな使命のためには、時に離れることがあつても、それはやむを得ないことであり、また差支へないのではないか。

卒直に結論を述べると、淨瑠璃も人形もこの際英斷を以て、踢蹐たる天地から解放される氣にはならぬか。本格を嚴守することもとより結構であるが、いはゆる本格の内容は、藝術であつて形觀ではない。淨瑠璃には淨瑠璃の使命があり、人形にはまた人形としての境地がある筈である。すでに歌舞伎の舞踊等に、文樂の淨瑠璃陣が出演してゐる例もあり、清元・常磐津・長唄等に人形を用ひた例もある。それをもつと自由にし、擴充するのである。

殊に潔癖な床の方から、歌舞伎の淨瑠璃狂言に對して、ドシ〳〵名演技者を送ることにしたらどうか。チョボ語りになつたが故に崩れるやうな藝術なら、どうせろくな藝術ではない。要は太夫と三味線彈き乃至協調する俳優の心構へ一つで、相手が口をきかぬ人形の場合には、コトバをすべて語るがよし、口をきく人間の俳優なら、當然セリフをいはせるべきである。それでよいのであり、もとはそこから發足した筈だ。

これはわたしの五六年前からの持論であり、いはゆる玄人仲間からは、突飛過ぎるとして排斥され來つたのだが、最近文樂の新人たる綱太夫・彌七兩人に話したところ、案外共鳴されさうなので、この機會にあらためて提唱することにした。實行方法については、更に愼重な考慮を要することいふまでもない。